

おはようございます、浄土真宗本願寺派 円光寺 村井敬成と申します。

秋も深まり朝夕と肌寒くなってまいりました。庭のイチョウやもみじも、それぞれ黄色や赤に染まり、秋が深まったことを私たちに知らせてくれています。その風景を見ながら思い出される絵本があります。タイトルは『葉っぱのフレディのいのちの旅』。

この絵本の主人公は春に芽生えたフレディという名前の葉っぱです。夏頃には青々とした大きな葉っぱに成長しました、フレディの親友にダニエルという葉っぱがいます、ダニエルは一番の物知りでフレディはダニエルから色々なことを教えてもらいながら成長し、生きてゆく喜びを知っていきます。

季節が移り変わり霜の時期になると葉っぱたちが一斉に紅葉します。フレディは赤・青・金色の三色の葉っぱに変化しました。一緒の季節に同じ木から生まれた葉っぱにもかかわらず、それぞれの葉っぱが全部違う色に紅葉することに驚くフレディに、ダニエルは生れたときは同じ色でも、いる場所が違えば太陽に向く角度、風の通り具合も違う、何ひとつ同じ経験はないから違う色に紅葉することを教えてくれました。

そして冬の到来とともに、葉っぱたちは冷たい北風にあおられて次々に落ちてゆきます、仲間の葉っぱたちが「さむいよう」「こわいよう」

とおびえました。その時ダニエルが言いました

「みんな引越しする時が来たのだ、僕らは一人残らずここからいなくなるんだ。」

それを聞いたフレディは悲しくなりました。なぜならここはフレディにとって、居心地の良い夢のような場所だったからです。

そして仲間の葉っぱたちが落ちてゆく中でフレディはダニエルが言っていた引っ越しが死であることに気がきます。やがてすべての葉が散り最後の一枚になった葉っぱのフレディも雪の朝に静かに枝を離れてゆきます、そして散りゆく中でダニエルから聞きたいのちという言葉を思い出します。

このような短い物語の中に擬人化された葉っぱの一生を通していのちを考える絵本になっています。それぞれに受け止め方はあるでしょうが、葉っぱのフレディを私と受け止めれば、生まれ・出会い・老いて・死を迎え自然の中にいのちが帰ってゆくという人生のストーリーと、そこには何ひとつ同じ人生はなく常に変化してゆくものであるという作者のいのちへのメッセージが伝わってきます、これらは誰に対するメッセージなのでしょう？

作者のレオ・ブスカリアは

「この絵本を死別の悲しみに直面した子供たちと、死について適格な説明ができない大人たちへ」

と書いています。

別れの悲しみに出会い、死を的確に説明できない事の大問題、そこには悲しみしか残らない暗いいのちの姿が見え隠れしているように思われます、生きることを死を別に考えたり、死が心肺停止や脳死などの医学的な判断だけの説明と受け止めたりしたならば、なおさら今を生きている私のいのちに対してむなしさだけが漂い、今を生きる事に良かったとうなずきながら人生を歩んでいけるのでしょうか。

死を明らかにしてそれを超える教えに生きる事で「いのち」が輝き始めることを説くのが仏教であり、仏の教えは私のいのちは生と死と書いて「しょうじ」と読みますが、生死一如である^{しょうじいちによ}と教えてください。これは生きるということと、死んで亡くなるということが別の問題ではなく、二つに分けることができない真実である事を意味します。なるべく楽しく生きたい、明るく生きたいと願う私たちですが、常に移りゆくなかで若さを失い、健康を失い、大切な人を失う、でもそんなことを認めれない私たちは失ってもなお頑張って、別のモノを手に入れ空しさを埋めようとします。でもやはり失ってしまう。そしてその先にあるものは自分のいのちを失う現実です。

「露とおち 露と消えにしわが身かな 難波のことも 夢のまた夢」

この有名なうたは天下統一を成し遂げた豊臣秀吉の辞世の句とされています。戦国の世を自分の才覚で渡り歩き、ついに天下人になって大阪城を建て地位も名誉も財産も一代で築き上げた秀吉が、死という現実に出会った時に、

「私のいのちは露のようにこの世に生れ落ち露のようにはかなく消え去るいのちであった、大阪城での栄華の日々も夢のまた夢のように儚いものであった」

と残しています。どれだけの財産や地位があろうとも死んでゆかなければならないという現実の前では色あせてしまう事を教えてくれています。

では、たまたま人間に生まれた私のいのちが、どうすれば生きてよし死んでよしと、安心して人生を歩めるのでしょうか。人間・自己を超えたものにあうと本当の自分が見えてきます。地位や名誉や財産など自分の幸せのために、あれがなければ、これがなければ、あの人さえてくれればといった思いを握って離さない生き方こそ、私のいのちを苦しめている原因であることがはっきりしてきます。

しかもこの苦しみを自分で解決することはとても難しいことなのです。一つ手に入れ、一つ問題が解決し安心して次々と問題が起りすぐに不安になってしまう私です。

阿弥陀さまは、そんな私をすでにご存知で^{しょうじ}生死の現実の前にすべてを手放してゆき空しいと嘆く私に、
「すべてを手放し独りになり明りのない迷いの世界に落ちようとも必ず救いとして見捨てることはありませんよ」
と常に働きかけておられるのです。そこにはいのちには生にも死にもひとしく価値があるという仏の智慧が具わっています。

自己中心的ないのちの見方しかできない私が大きな仏の働きに出会う時、そこには生死を超えて安心して人生を歩む世界が開かれてきます。今日も一日ともに願われているいのちを、精一杯生きていきたいものです。